

皇國日本の道徳的實踐、皇道世界宣布、將來の創造に對する嚮導的指針が與へられねばならぬ。而してこの事こそ萬民をして正しい生を遂げしめ、天業の恢弘に翼賛し奉るべき「日本本來の地理學の任務」ではなからうか。之を明示し、「現代神話の八咫鳥」の役割を果してゐるのが本書である。

私は本書を二度、三度読み返す度に深い感銘を受けた事を告白すると共に「英國は滅亡す」の篇の如く軽い隨筆風の中に深い示唆を與へるものすらあつて、著者の熱ある文章は一氣に讀者を卷末迄引張つて行くであらう事を確信し、前著「日本地政學と共に廣く熟讀されん事を望んで此の紹介を終り度い。(B6判・二二三頁・十七年十二月・白楊社發行・定價貳圓) (岡本信太郎)

改訂 日本地理學史 藤田元春著
増補 日本地理學史 鮎澤信太郎著

鎖國時代の世界地理學 鮎澤信太郎著
大日本海——日本地理學—— 同 著
史の研究

地理學の歴史は、單にいふところの科學史としてのみ取扱はるべきものではないであらう。それはわれわれの土地への自覺そのものに、より多くの關はりをもつからである。地理學的世界像は地表に關する精密な知識に於いてよりも、その精密化を促がした地盤の上にこそ成立してゐるといふことができる。いふならば地理學の發展は國土と世界との反省の歴史であり、精神史に於けるひとつの事實として考へらるべきものをもつとせられるであら

う。その意味に於いて、大いなる戦ひのもと、國家への思念と世界への意識が限りなく昂まりつゝある今日、わが國の地理學史に關する研究が深い期待を以て俟たるべきことは多言を要しない。最近相踵いで刊行された上記の三著を紹介し得ることは、それ故に同學のわれわれの悦びたるのみではないのである。

藤田教授の「日本地理學史」は早く昭和七年に上梓せられて、今ではこの分野に於ける「古典」となつてゐる。しかし斯界の陳腐たるもの、避け難い誤謬が白玉の瑕瑾となつてゐたことも事實であつた。今回著者はこれに嚴密な改訂を施し、更にその後の研鑽に成る佐藤政義の地圖その他四篇を加へて再刻せられた。日本地理學史を一應骨格づけたこの歴史的な著書の新しい門出を、老來益々盛な著者の爲にもお悦びしたい心である。

鮎澤學士之二著は、「東洋地理思想史研究」以來倦むことなき著者の精進の結晶である。「鎖國時代の世界地理學」は西川如見、林子平、三浦梅園、司馬江漢、森島中良、高橋景保、齋藤拙堂、渡邊華山、吉田松陰、武田簡吾の諸家の地理學的業績を紹介し、なほ譯司松村元綱の「和蘭航海略記」が附載せられてゐる。それぞれ獨立した論文であるが、通讀して暮末期のわが世界知識の概要を知り得るであらうし、幾多の新資料の紹介、舊説の是正がそれを一層貴重なものとしてゐる。同じ著者の「大日本海」は、いはより軽い意味で執筆された論文を集録されたもので、書名に取られた大日本海と題する論文では太平洋を大日本海と呼んだ古地圖を考證され、その稱呼を再び採用すべきことを提唱されて要路者の

間にも多大の反響を呼んだのである。たゞ讀者としては、この大日本海の名がマゼラン的な太平洋の概念と支那人の所謂南海に於ける東西洋、特に小東洋の概念との間に如何に位置してゐるかに就いて博識の著者の教示を乞ひたい感じがする。しかしこの兩書を特色づけるものは著者の精到な考證と着實な調査とであつて、それが讀者にこの眞摯な作品への信頼感を興へてくれるであらう。なほ以上の三著とも出版の不自由な際、比較的鮮明な圖版が多數加へられ得たことも悦ばしい。(日本地理學史・刀江書院刊・定價七圓五拾錢、鎖國時代の世界地理學・日大堂刊・定價參圓八拾錢、大日本海・京成社出版部刊・定價參圓) (室賀信次)

Stephen W. Reed

The Making of Modern New Guinea

ニューギニアが暗黒の大島といはれるのは、それが食人の風習をもつ未開民族の住地であつたからでもあり、一面この地域の調査が今まで餘り行はれてゐなかつた爲であるとするならば、この地域の研究それ自身が確かに大きい意義をもつといつてよい。社會學者としての著者がこの島の研究を志したのは彼の考へではこの島が「歐人と黒人の文化的接觸の實驗場」としての好個の地域であつたからである。尤も本書に取扱はれてゐる地域は舊獨領で後に國際聯盟によつて濠洲委任統治領となつた北東ニューギニアに限定されてゐる。

第一章土地と住民に於いて歐人渡來以前の本島の土着文化の形

體を述べ、第二章に本島が歐人に發見されてより歐洲國家の一つの「附屬物」となつて行つた一聯の歴史的事件を記述し、第三章に一八八四年歐人支配權が確立されるまでの十ヶ年間に漸次貿易者農業經營者、布教者などの歐人の出現によつて始まる文化的接觸を取扱ひ、次いで歐人の政治的優位がいかにして獲得されそれが土民社會の生活に新しき狀態を強制して行つたかを考察しようとするが、この島に樹立された二つの歐洲統治權、即ち獨領の時代と濠洲委任統治領の時代との二章に分けて土民統治の具體的考察がなされる。

この島の經濟の様相は歐人との接觸により今では本來の土着經濟と歐洲的資本主義機構とが殆んど區別され得ない狀態となつてをり、これはこの島の主要産業たるコブラ生産、鑛山企業を歐人が經營することにより齎された現象であることは云ふ迄もないが、第六章はかゝる産業と貿易より専ら現在當領の經濟力を中心に考察がなされ、最後に現代「ニューギニア」新しき社會の創生」の一章を設け、歐人との接觸から本島に新しき社會が形造られつゝあるとなし、その文化的接觸に於ける個人の役割とか、新しき文化構造を創造する素因を論じ、社會學者としての著者の最も得意とする處であることは推測に難くない。かくて最後に「高低文化の接觸を解するもの多くは土着文化の逝去を悲む」が「ニューギニアの古い文化も亦急速に消失しつゝある。併し之は若い世代のもの、がその生誕より慣らされて來た狀態である」本島の土民はより大なる安全感によりより健康に、より安定せる食糧に、昔より